

「2014年 全日本F3の  
主役は誰か？  
シーズン後半戦を占う」



©RACING NEWS formula 2014

2014年の全日本F3選手権は6月に行われた第3ラウンド・岡山大会終了時点で、全15戦中7戦を終了。わずか2か月たらずで折り返し地点を迎えたのだが、今年全日本F3はここ数年の中で一番、見ごたえのあるシーズンとなっている。

2009年のマークス・エリクソン（現ケータハムF1）を最後に「速いガイジン」がいなくなっから全日本F3は、毎年、同じドライバーが金曜日のフリー走行でトップタイムを刻み、土曜日の予選ではポールポジションを奪い去り、日曜日そのまま先頭でチェッカーを受けるレースばかりが繰り返されていた。2010年は国本雄資、2012年は平川亮、2013年は中山雄一によって。確かに2011年は、シーズン途中から参戦した関口雄飛が、最終戦までもつれながらチャンピオンをかっさらっていったというドラマもあったのだが、ペナルティを受けての降着や、台風による大会中止などもあった混戦であり、純粋なレースの中での競い合いという意味ではやはり、関口の独断場だったように思える。

私が、F3の取材を始めたのは2010年のシリーズ中盤ごろ。国内の選手権では、スタートで隊列が整ってしまえば、そのまま順位が動くことなくレースが終わってしまう単調なレースばかりとなり、マカオGPでは全日本F3勢の惨敗が続いていた。今年も同じような展開が続くようならば、国内F3については少し距離を置こうかという考えが浮かびはじめながらも、2014年のシーズンの取材を続けていた。

しかし、実際にはそんな考えを忘れさせてしまう幕開けでシーズンは始まり、毎戦、予想のつかない展開で、選手権争いが繰り広げられている。

鈴鹿で行われた開幕戦では、トムスのルーキー山下健太が2番手からのスタートを失敗し、4位まで順位を落とすも、自身の速さを披露させるかのようなオーバーテイクショーを繰り広げて初優勝を飾った。チームの中からも「あんな抜き方をするやつが出てきたのは久しぶりだ」、「まるでガイジンみたいな抜き方をする」という驚きの声が漏れ、パドックで別カテゴリーの取材をしていても「F3に面白い若い子が出てきたね。スタッフみんな、画面に釘づけだったよ」という期待の声が回ってくるほど、山下の走りはサーキット中の人間を魅了させた。翌日の第2戦はPPスタート。前日に魅せた速さから、ぶっちぎりの独走を期待したが、この日は、速さの方ではなく、

自身も認める“ド下手”なスタートの方で観客を注目させてしまい3位。それでも開幕戦での印象は大きく、今年は山下が独走するシーズンになってしまうのかという予想も思い浮かんだが、そう断言するのは一旦、次大会まで先送りにすることにした。

迎えた第2大会もてぎラウンド、主役は山下ではなかった。もてぎの主役に躍り出たのはHFDPの松下信治。この大会では木曜日にも練習走行枠が設けられ、4日間にわたるレースウィークとなったのだが、木曜日のリザルト以外はすべてのセッションにおいて、松下の名前が1番上に刻まれていた。F3参戦2年目、初優勝からの3連勝。鈴鹿では2レースともに4位と、印象に残ってはいなかったが、ランキングも一気にトップの山下と1ポイント差の2位につけた。

山下の開幕戦での速さはまぐれだったのか？もてぎでの松下の速さの理由はなんなのだろうか？

ひとつめに対する答えとしては、山下が鈴鹿で魅せた速さは本物であると思う。ただ、もてぎ大会では、木曜の走行から、開幕の2戦で見せてしまったスタートの遅さを克服するため、スタート練習に時間を費やしたのだという。そのため、クルマのセットアップに費やす時間が無くなり、その分、ライバルチームに後れを取ったのだと、山下の担当である山田淳エンジニアは敗戦の理由を述べた。では、松下はトムスが後れを取ったから勝ったのか？こちらもそうではなく、松下が速かったからなのだと思う。

HFDPが搭載している無限のエンジンMF204Dは低速域で強さがあると言われている。もてぎのスタートからストップアンドゴーを繰り返すセクター1ではそれが活かされると見られ、実際にセクター1のタイムは他車を大きく引き離していた。そして、その特性だけではなく、参戦2年目になり成長した松下が、エンジン特性を活かしたドライビングをしたことにより勝利を獲得した。もてぎ大会から松下の表情は自信が溢れたものになり、チームも今までの少しばかり近寄り感がたく硬い空気がやわらかくなっていった。HFDPから感じる雰囲気は、今回の勝利がまぐれではないものなのだと感じさせた。

だが、この時点で新たな疑問も出てくる。もてぎでのHFDPの勝利は、コースとエンジンの特性が合っていたからだとするならば、次戦以降はどうなのだろうか。

今シーズンの主役がだれなのか、未だ見えぬまま迎えた第3大会岡山、行われた2レースの勝者は

第1レースが佐々木大樹、第2レースが山下健太となった。しかし、勝利者の名前には残らずも、木曜日の合同テストから予選1回目まで常にトップに名前を残していたのは松下信治。第1レースはスタートで佐々木にトップを奪われ、第2レースではフォーメーションスタートでエンジンがストップ。悔しい週末となってしまったが、第2レースではファステストラップを出しており、松下の速さはもてぎだけのものではないと証明させた。一方、現段階でのもうひとりの主役候補である山下は、初めて走る岡山のコースに苦戦していた。第1レースではチームメイトの勝田と接触し、コース外に大きくはみ出し5位。第2レースではひとつ前にいた松下がスタート前に姿を消し、PPの勝田がマシントラブルによりレース中に順位を落とし、「何もしないで勝った」と肩を落としていた。

3大会7レースを終えた時点で、選手権ランキングトップは50ポイントを獲得した山下健太、2位は2ポイント差の松下信治となった。わずか3大会ではあるが、すでに折り返し地点を迎えようとしている2014年の全日本F3選手権。もちろん、他のドライバーにもチャンピオンの可能性は残されているというものの、シーズンの主役は山下と松下の二人に絞られたと言ってもよいだろう。そして、どちらが本命になりどちらが対抗となるのか、それは次戦の富士ラウンドで決まると予想する。

残るシーズンの後半戦は4大会8戦で行われるのだが、そのうち2大会4戦の戦いの場が富士なのだ。残りの戦いのうちの半分が富士で行われ、最終戦の場が富士となる。このままのポイント差でシリーズが動くようならば決着は最終戦までもつれ込むことになる。よって、次戦の富士で結果を残すだけでなく、しっかりと速さを証明しておかなければいけない。7月の富士で圧勝できれば、10月の最終戦も間違いなく優勝候補となり、その速さは残りのもてぎと菅生大会でもプレッシャーとなり有利に働くことになるであろう。果たしてだれが次戦、富士の主役になるのか。

ここで、大穴候補として名前を挙げたいのはNDDP B-MAXの佐々木大樹だ。佐々木は2年ぶりのフォーミュラであり、NDDPとしてもF312シャーシに移行初年度ということで、開幕当初から苦戦していたが、岡山大会では初優勝と2位となり、一気に台頭してきた。ポイントランキングはトップと24ポイントと大きく離れてはいる。だが、3月に富士で行われた第1回合同テストでトップに名前を連ねていたのは佐々木だった。岡山からの躍進が本物であるのならば、シーズン争いをかき乱す筆頭候補になるであろう。2012年の全日本F3Nクラス王者として、現SUPER GT500クラスのプロドライバーとして、どのように戦いに食い込んでくるのかを注目したい。

富士の主役候補の大穴として佐々木の名を挙げたが、選手権争いではトップとの差も大きく、こちらの本命はやはり山下と松下のどちらかになると予想する。ではどちらが本命に躍り出るのだろうか？

今シーズンの松下からみなぎる自信はとても頼もしく、2年目ということもあり、ドライバーの力としては松下の方に分があるように見える。8月のもてぎ大会も、すでに勝っているコースということで自信を持っており、現時点では、松下を本命として挙げたい。しかし、富士はトムスのお膝元。クルマを含めた総合力ではトムスが優位になるだろう。3月の合同テストでは、勝田が4番手、山下が5番手となったことが不安要素ではあるが、それは金曜日の練習走行でどうなることか明らかになるはずだ。対抗となるルーキー山下、本人のコメントからは、常にレース展開を予想しながらクルマやタイヤをきちんとコントロールし、運転をしているドライバーなのだと伺える。そして、速く走れた時は無邪気に喜び、結果が出ないときは悔しさをにじませながら、原因を探るために早くデータを見たいとそわそわしている姿は、とても微笑ましい。鈴鹿での走りを、富士で再び魅せることができるのだろうか。

今年の全日本F3が単に接戦だからということだけで、見ごたえがあると言っているのではない。タイムや順位だけでなく、若手ドライバーたちがしっかりと成長していく過程が、彼らの表情や言葉からもきちんと伝わってきており、それが頼もしく感じられるシーズンとなっている。

シーズン後半戦、彼らがどのように成長していくのか。新たな表情が見られるようものならば、できるだけ多くお伝えしていきたいと思うが、サーキットに足を運ばれる方は、ぜひとも表彰台に立つ彼らの姿も見ていただきたい。文章になるのを待たずとも、そこにある姿を見るだけで、彼らがどんなレースをし成長したのか、直に感じ取っていただけたらと思う。